

JASWE ソーシャルワーク専門職のコンピテンシー(素案)意見募集版

構成	領域	説明	到達目標	観察可能な行動目標
ソーシャルワークの価値・倫理にもとづくコンピテンシー	1.1 倫理綱領・行動規範に基づく判断	ソーシャルワーク専門職は、専門職としての使命と責任、アイデンティティを自覚し、倫理綱領、行動規範、関連法規を踏まえつつ、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの尊厳と権利を基盤として行動する。自らの権限と限界を理解し、守秘、説明責任、適切な記録、境界の保持を実践するとともに、専門職としての判断に責任を持つ。	ソーシャルワーク専門職は、ソーシャルワーク専門職の使命、倫理綱領、行動規範、関連法規を踏まえ、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの尊厳と権利を基盤として判断し行動することができる。 また、自らの専門職としてのアイデンティティ、役割、権限、限界を理解し、守秘、説明責任、適切な記録、境界の保持を実践できる。	<ul style="list-style-type: none"> * 倫理綱領や行動規範に照らして、自ら判断できる。 * 倫理的ジレンマを含む事例について、複数の論点を整理して検討できる。 * 守秘義務と情報共有の必要性の両立について説明できる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティに対して、理解可能な言葉で説明できる。 * 面接記録、支援記録、実習記録を適切な形式と内容で作成できる。 * 自らの役割範囲を超える課題について、関係職種に相談できる。 * 不適切な対応や権利侵害の可能性に気づき、放置せず報告・相談できる。 * ソーシャルワーク専門職の専門性・アイデンティティを的確に説明できる。
	1.2.1 人権・社会正義・環境正義の推進	ソーシャルワーク専門職は、すべての人の尊厳、権利、参加を尊重し、差別、抑圧、排除、貧困、暴力、環境破壊などに対して、人権および社会正義の観点から取り組む。個人の困難を個人要因のみに還元せず、社会的・構造的要因を捉え、より公正で包摂的な社会の実現を目指す。	ソーシャルワーク専門職は、個人の困難を個人要因のみに還元せず、社会構造、制度、差別、貧困、排除、環境要因との関連から理解できる。 また、人権、社会正義、包摂の観点から支援や働きかけの必要性を判断し、より公正な社会の実現に向けて実践できる。	<ul style="list-style-type: none"> * 生活課題を制度的・社会的・環境的背景と関連づけて説明できる。 * 事例における権利侵害、不平等、排除の要因を指摘できる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティの権利擁護の必要性を具体的に述べられる。 * 支援計画に、参加の保障やアクセス改善の視点を含めている。 * 差別や偏見を再生産する表現や対応の問題点に気づける。 * 地域課題や社会課題を、個別支援とつなげて考察できる。 * 災害、気候、居住環境などが生活に与える影響を説明できる。
	1.2.2 多様性の尊重、反差別、包摂の実践	ソーシャルワーク専門職は、人々の多様な属性、経験、価値観、文化的背景、生活史を尊重し、それらが支援関係と社会参加に与える影響を理解する。差別、偏見、スティグマ、抑圧を再生産しないように自己を省察し、多様性を尊重し包摂を促進する実践を行う。	ソーシャルワーク専門職は、人々の多様な属性、文化、価値観、生活史、家族形態、社会的立場づけが支援に与える影響を理解し、それらを尊重した実践ができる。 また、自らの先入観や権力性を省察し、差別や排除を再生産しない支援関係を築くことができる。	<ul style="list-style-type: none"> * 年齢、障害、性別、文化、言語、国籍、家族背景などの多様性を踏まえて状況を分析・理解できる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティの多様性を尊重し、常に学び続ける態度を示すことができる。 * 自分自身の価値観や前提が判断に影響しうることを言語化できる。 * 一律の前提で個人や集団を理解せず、個性を尊重した表現を用いている。 * 支援場面で合理的配慮やコミュニケーション上の工夫を検討できる。 * 偏見、スティグマ、差別的対応の問題を具体的に指摘できる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティの語りを、その人の文脈に即して理解しようとしている。 * 包摂を促進する支援方法や環境調整を提案できる。
	2 実践と研究の往還	ソーシャルワーク専門職は、研究知見を実践に活かし、また実践から生じる問いを研究方法を用いて検討する。根拠に基づく実践を志向しつつ、現場の経験知や個人、家族、グループ、組織、コミュニティの知を尊重し、実践知の生成と共有に貢献する。	ソーシャルワーク専門職は、研究知見を実践に活用し、実践の中から生じる問いを検討し、根拠に基づいて支援を考案することができる。 また、現場の経験知や個人、家族、グループ、組織、コミュニティの知を尊重しつつ、実践知の生成と共有に参加できる。	<ul style="list-style-type: none"> * 実践上の問いを明確な言葉で設定できる。 * 文献、統計、調査結果などを用いて課題を検討できる。 * 根拠を示しながら支援方法を説明できる。 * 研究知見をそのまま当てはめるのではなく、現場文脈に応じて解釈できる。 * 実践記録や事例検討から学びを抽出できる。 * 小規模な調査や振り返りを通じて支援改善の視点を示せる。 * 実践と研究が相互に影響し合うことを説明できる。
3 省察、セルフケア、継続的専門職発達	ソーシャルワーク専門職は、自らの実践、価値観、感情、立場性、判断過程を省察し、実践の質の向上に活かす。また、自己管理とセルフケアを行い、継続学習、スーパービジョン、研修、対話を通じて専門職として成長し続ける。	ソーシャルワーク専門職は、自らの実践、感情、価値観、立場性、判断過程を省察し、実践の質向上に活かすことができる。 また、自己管理とセルフケア、スーパービジョン、継続学習の重要性を理解し、専門職として成長し続ける基盤を身につける。	<ul style="list-style-type: none"> * 自らの関わりを振り返り、課題と学びを言語化できる。 * 感情反応や先入観が実践に影響する可能性を認識できる。 * 困難場面で一人で抱え込まず、相談や助言を求められる。 * フィードバックを受けて実践を修正できる。 * 自己管理やセルフケアを実践できる。 * 学習課題を自ら見出し、継続的な学習計画を立てられる。 * 生涯研修やスーパービジョンの意義を理解している。 	
4 政策形成、制度改善、アドボカシー	ソーシャルワーク専門職は、地域・国・世界レベルにおける制度、政策、組織運営が人々の生活に与える影響を理解し、必要に応じて制度改善、政策提言、権利擁護、組織内外への働きかけを行う。個人・集団の声を可視化し、社会資源や制度へのアクセス改善を促進する。	ソーシャルワーク専門職は、地域・国・世界レベルにおける政策、制度、組織の仕組みが人々の生活に与える影響を理解し、必要に応じて制度改善、アクセス向上、権利擁護、組織内外への働きかけを構想し実践できる。	<ul style="list-style-type: none"> * 人々の生活と地域・国・世界レベルにおける制度・政策の関係を説明できる。 * 個人・集団が制度から排除される要因を指摘できる。 * 必要な制度利用を促進するための支援方法を考えられる。 * 個人・集団の声を整理し、課題として表現できる。 * 組織や地域に対する改善提案を文章や口頭で示せる。 * 個別課題を社会的課題として捉え直すことができる。 * 権利擁護のための相談、申立て、調整、働きかけの必要性を説明できる。 	
ソーシャルワークのプロセスにもとづくコンピテンシー(個人、家族、グループ、組織、コミュニティ)	5 関係形成と協働	ソーシャルワーク専門職は、個人、家族、グループ、組織、地域住民、関係機関、他職種等との間に、信頼と相互尊重に基づく関係を形成し、共通の目標に向けて協働する。対話、共感、参加の促進を通じて、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの主体性を活かした支援関係を築く。	ソーシャルワーク専門職は、個人、家族、グループ、組織、地域住民、関係機関、他職種との間に、信頼と相互尊重に基づく関係を形成し、共通目標に向けて協働できる。 また、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの主体性を尊重しながら支援関係を構築できる。	<ul style="list-style-type: none"> * 面接や相談場面で、相手の話を傾聴し、要点を確認できる。 * 相手の感情や立場に配慮した応答ができる。 * 個人・集団の意向を確認せずに支援を進めない姿勢を示している。 * 支援目標や課題について、個人・集団と共有・合意しようとしている。 * 会議や打合せで、他職種や関係者と必要な情報共有ができる。 * 関係機関との連携時に、役割分担や連絡方法を整理できる。 * 対立や認識のずれが生じたときに、対話による調整を試みられる。
	6 総合的アセスメント	ソーシャルワーク専門職は、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの状況について、生活課題、強み、資源、関係性、制度的条件、環境要因を総合的に把握し、支援課題と可能性を整理する。アセスメントは一時点の判定ではなく、実践過程の中で継続的に見直されるものとして行う。	ソーシャルワーク専門職は、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの生活課題について、ニーズだけでなく、強み、資源、関係性、制度的条件、環境要因を含めて総合的に把握できる。 また、アセスメントを継続的かつ動的な過程として理解し、支援の見直しに活かすことができる。	<ul style="list-style-type: none"> * 個人・集団の困難だけでなく、強みや既存の資源も把握できる。 * 個人要因、家族要因、地域要因、制度要因を関連づけて整理できる。 * 面接、観察、記録、関係者情報など複数の情報源を用いて状況理解できる。 * 問題の所在を多面的に検討し、仮説として整理できる。 * リスク要因と保護要因の両面を示せる。 * アセスメント内容を個人、家族、グループ、組織、コミュニティにわかる形で説明できる。 * 支援過程の中で、新たな情報に応じて見立てを修正できる。
	7 支援の計画、実施、調整	ソーシャルワーク専門職は、アセスメントに基づいて支援目標と計画を立案し、個人、家族、グループ、組織、コミュニティと合意形成を図りながら、適切な支援を実施・調整する。直接支援、相談、資源活用、ネットワーク形成、予防的支援、危機介入等を状況に応じて活用し、支援の連続性を確保する。	ソーシャルワーク専門職は、アセスメントに基づいて支援目標と計画を立て、個人、家族、グループ、組織、コミュニティとの合意形成を図りながら、必要な支援を実施・調整できる。 また、直接支援、相談、資源活用、ネットワーク形成、危機対応などを状況に応じて組み合わせられる。	<ul style="list-style-type: none"> * アセスメントに基づいた具体的な支援目標を設定できる。 * 支援計画に優先順位、方法、役割分担、見直し時期を示せる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティの意向を踏まえて支援内容を調整できる。 * 適切な制度、サービス、社会資源を提案できる。 * 関係機関へのつなぎや調整を行える。 * 危機的状況では安全確保を優先した対応を考えられる。 * 支援の終結、移行、引継ぎについても見直しを持てる。
	8 実践の評価と改善	ソーシャルワーク専門職は、支援過程と支援結果を継続的に振り返り、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの変化、目標達成の状況、支援方法の妥当性を評価する。評価結果を実践の修正、改善、再計画につなげ、より効果的で適切な支援を追求する。	ソーシャルワーク専門職は、支援過程と結果を振り返り、目標達成状況、支援方法の妥当性、個人、家族、グループ、組織、コミュニティの変化を評価し、その結果を実践の修正と改善につなげることができる。	<ul style="list-style-type: none"> * 支援前後の変化を、具体的な事実や記録に基づいて説明できる。 * 設定した目標に照らして支援の効果を検討できる。 * うまくいかなかった点を個人の努力不足だけに帰さず分析できる。 * 評価結果を踏まえて、支援計画の修正案を出せる。 * 個人、家族、グループ、組織、コミュニティの評価や感想を支援見直しに取り入れられる。 * 自己評価だけでなく、関係者からの評価を受け止められる。 * 実践の改善に向けた次の行動を具体化できる。